

HKFA Technical Report 2019

令和元年度 第98回全国高等学校サッカー選手権大会北海道大会 決勝

日時
2019年10月21日 (日)

会場
札幌厚別公園競技場

札幌第一 高等学校	(0-0) (0-1) 0-1	北海高校
--------------	-----------------------	------

HKFA TSG member

宮永 裕教(HKFA TSG)
小林 俊也(HAFA 一貫指導)
寺島 徹(HKFA U-14)
三国 弘樹(HKFA U-16)
塚田 泰成(HKFA U-16)
岡田 慎司(HKFA U-16)

ベスト8進出チーム

札幌第一高校
北海道科学大学高校
東海大学札幌高校
市立函館高校
とわの森三愛高校
帯広北高校
駒大苫小牧高校
北海高校

1 大会の概要

今大会決勝は、今年度の高校総体の決勝と同じ組み合わせとなった。高円宮杯 JFA U-18サッカープリンスリーグで3位となり、着実に力を身に付けている札幌第一と、高円宮杯 JFA U-18 ブロックリーグ札幌において1敗のみの首位で、安定した結果を残すことができている北海高校の対戦は、一進一退の接戦となった。

<2種委員長 荒忍氏>

この高校選手権は、ノックアウト方式ということもあり、ロングボールの応酬になることがありました。ですが、今年度についてはタッチ数の少ない速いパス回しが多く、また、高い位置からボールを奪いに行くといったよい習慣が、各チームでみられるようになってきました。これは、リーグ戦文化の醸成と、全てのカテゴリーにおいて守備の強化に取り組んでいることの成果だと思えます。特に地方の公立高校ではその意識が高いと思えました。また、ベスト4進出チームは、自校に人工芝グラウンドを持っています。そういったハード面の整備が、結果に結びついているとも言えると思えますし、降雪のある北海道にとっては、非常にメリットの大きいことだと思えます。

この決勝戦は、インターハイの決勝と同カードということもありますので、これまでのプリンスリーグの成果を活かして頑張りたいと思えます。

2 両チームへのインタビュー

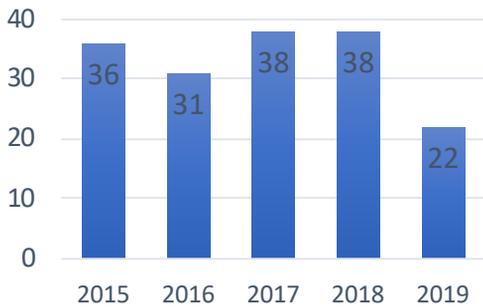
<札幌第一 監督 佐藤 祐介氏>

これまでのチームづくりとしては、考えるサッカーを実践してきました。チームのサッカーにかかわる全てことを選手が決めてきましたので、あとは選手を信頼するのみです。

また、インターハイ決勝で引退した3年生の抜けた穴を下級生が見事に埋めてくれて、この選手権決勝の舞台に立つことができたと思えます。ここまでよく対応してくれました。



ポゼッション



■ ポゼッション (回数)

(目標の目安～10分で5回成功)

スローイン(%)



■ スローイン(%)

(スローイン後、パス1本成功でカウント)

<データ比較>

5年間の比較としては、両項目共に減少しているが、両チーム共に、トーナメントでの失点が1点であることから、堅守のチームコンセプトを発揮した結果と考える。

<北海高校 監督 島谷 制勝 氏>

押し込まれる展開になることが予想されるので、粘り強く守備をして、少ないチャンスを生かしていきたいと思います。また、トーナメントは厳しい山に入っていたので、全て決勝のつもりで戦ってきました。この決勝も特に今までと同様に戦いたいですし、第一高校のスピーディーな攻撃にしっかり対応したいです。また、守備組織がしっかりしているので、整う前の攻撃を意識したいです。バイタルエリアを早くついたり、相手が戻りながら守備をするような場面を作ることと、セットプレーも大事にしたいと思います。

3 成果

【守備における1対1の対応】

オフの部分も含め、両チームとも良い対応が多かった。前線からプレッシャーをかけることができる場面では、2nd,3rdDFの選手も連携・連動し、相手の状況に応じたスタートポジションをしっかりと取っていた。チームとして冷静に対応していたと言えるだろう。

また、意図的に相手のパスを追いつき、インターセプトを狙いボールを奪うシーンも見られるなど、チームとしてのコンセプトに対して忠実なプレーが光っていた。

【攻守の切り替え】

北海高校は、攻撃から守備への切り替えが速く、ボールを失った直後から相手の攻撃を遅らせる意識を、チームとして発揮することができていた。

対する札幌第一高校は、カウンターを仕掛けられなかった場面でも、シンプルにボールを動かしながら狭いスペースを突破することができるなど、相手の守備組織の状況に応じた攻撃を展開することができていた。

4 課題

【アタッキングサイドのプレーの質】

<攻撃>

バイタルエリア付近まで、アイデアをもって攻略することができているが、ラストパスの質・精度に欠け、フィニッシュに至らないシーンが観られた。

また、クロスボールの質、ターゲットの入り方、合わせるタイミングにやや課題があった。フィニッシュの精度についてもオンターゲットパーセンテージが31%（両チーム総シュート数16本中5本枠内）であった。

<守備>

クロスボールへの対応に課題があると感じた。常に広い視野を保ち、体の向きや、状況に応じたステップワークなどの個人戦術の重要性を再認識させられた。

全体を通して、ゴール付近の攻防について、質の向上が課題であると感じた。時に攻撃面については、バイタル付近まで攻略できていても、フィニッシュに至らない、あるいは十分な体勢でシュートを打つことができていない、ゴールを決めるに至らないシーンが目立っていた。

ラストパス～フィニッシュの質については、北海道全体の課題であると考えている。



GKのプレー

【シュートストップ】

- ・枠内のシュートが少なく、キャッチングなどのテクニックの評価は難しい
- ・基本姿勢や構えるタイミングについては適切にとろうとする姿勢は感じられるが、相手の攻撃に複数の選択肢（例：ボール保持者がパスからシュート、ドリブルからのシュートが可能な状況）がある状態からピンチになった場面（結果的にシュートは枠外、パスは通らなかつたりと精度を欠いたものだった）でポジショニングがずれていたり、シュートに対するタイミングは適切にとれていないことがあった。

＜ブレイクアウェイ&クロス＞

- ・どちらのシチュエーションもプレーの質というよりはボールが来る前のポジショニングの修正が適切にできていなかった。その結果としてクロスボールやブレイクアウェイの場面でGKが積極的にプレーできず、相手の攻撃の可能性を下げるプレーができなかった。

【攻撃へのかかわり】

- ・パス&サポートは、両チームともGKまで下げるシーンはほぼ皆無（合計2本）で、評価するのが難しい。

- ・ロングパスはセカンドボールの回収から攻撃に繋げようとする意図から利用しており、成功回数が極めて低い（32本中2本）。チーム戦術に関わる部分なので一概には言えないが、GKから35～40mの距離をライナー性のキックによる配球ができればチームの攻撃に幅を持たせられると感じた。

- ・相手からボールを奪って素早く的確なスローイングによる配球でスムーズに守から攻へとつなげた場面もあった。※奪ったあとのことも考えてより守から攻へと繋げられればよい。

- ・逆サイドやDFの背後などを確認する場面がみられたが、パスが出そうな直前での確認が多く、そのタイミングでできることが明らかに少ない。そうであればGK自身がポジショニングを修正してボールが蹴られる瞬間をしっかりと見ておく方が、シュートやラストパスに対応でき、失点の可能性が下げられる

- ・クロスやパスの質が高くなった時に対応することが難しい。安パイなポジションや判断が多い（自ら相手の攻撃の可能性を低くするための味方へのはたらきかけ及び自身の積極的なポジション取りが少なかった。）

両チームへのインタビュー（試合後）

＜札幌第一監督 佐藤祐介氏＞

北海高校のディフェンスを打ち破れなく残念でした。しっかりブロックを作って守備を作られていたと思います。前からハードプレスされた方がこちらとしては良かったと思うのですが、北海高校の対応力はうちのチームよりも上だったと思います。サイドからのクロスが多くなることは分かっていたのですが、それを結構やられてしまいました。

ハーフタイムでは、後ろのつなぎとテンポを上げないと前につながらないので、もっと前にしかける攻撃をしなければならぬことを伝えました。失点の場面は常々言ってきたことであり、そこをミスするとやはりこういう結果になってしまうということ。攻撃はもっと相手GKがファインプレーをして止めなくてはならないような場面を作りたかったです。

＜北海高校 監督 島谷制勝氏＞

プラン通りにいきませんでした。9番（廣瀬）にボールが取まらなかったため、攻撃のリズムが出なかったと思います。トーナメントということもあり、互いにブロックを敷いて失点しないゲームになったと思います。第一の両サイドを使わせない狙いはある程度防げたシーンが多かったとは思いますが。あとはWBがよく守備に戻っていました。クロスシーンも多く作ることができたと思います。

まとめ

歴史のある本大会が年々レベルアップしている背景には、リーグ戦文化の醸成があり、そして、特徴のあるチームが上位に進出する傾向が見られるようになってきた。

最後に、2種委員長の荒忍様をはじめ、2種委員会及び出場チーム指導者の皆様、そしてHKFA/TSGの活動にご協力頂きました関係者の皆様に、深く感謝申し上げます。

